

新潟・青田遺跡

あおた



(中条)

- 1 所在地 新潟県北蒲原郡加治川村大字金塚字青田
- 2 調査期間 一九九九年（平成11年）四月～二〇〇一年九月
- 3 発掘機関 財新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 4 調査担当者 荒川隆史
- 5 遺跡の種類 遺物散布地
- 6 遺跡の年代 繩文時代晚期、弥生時代～中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は、享保年間以降の干拓で著名な紫雲寺潟（塙津潟）の中に位置し、縄文時代晚期の集落を中心とする。集落廃絶後、九世紀の

洪水による堆積の後に、地震などの断層運動によって地殻沈降し、紫雲寺潟の湖底下に遺ることになった。近隣

の古代・中世遺跡は、主に奥山荘々域の中心地にあった胎内川扇状地上に密集し、他に旧紫雲寺潟推定域の潟端や海岸砂丘の後背部にも

いくつかの集中が見られる。

木簡は一九九九年一〇月に行なった、日本海東北自動車道に隣接する用水路設置工事の立会調査で出土した。狭小な範囲の調査のため、出土時点の詳細な状況に関しては不明な点が多い。

整理の結果、二〇G一〇グリットに相当する地点のVI層から出土していることが明らかとなつた。この地点は、縄文時代晚期の集落の中を流れている河川（SD一四二〇）の左岸に近い。木簡が出土したVI層は、粒子のやや細かい粗砂の層である。層の厚みは薄いが、シルトや粘土といったさらなる細粒を含まないので、洪水などで短期間に堆積したものと報告されている。

木簡と同じVI層からは、九世紀中葉から末葉までの須恵器や土師器の他に、土錘、浮子、木製の盤、曲物側板、斎串・馬形などの木製祭祀具が出土している。土層の堆積状況も合わせて考慮すれば、木簡を含めたこれらの遺物は、周辺に所在する遺跡から洪水などによつて流れ、堆積したものと思われる。

なお、木簡と関係する可能性のある時期の遺構としては、調査区中央部に広がる泥炭層の堆積地（SX五一）で足跡が検出され、同じ頃の河川（SD一九）の近隣で小柱穴が検出されているだけである。ちなみに、直上のV層はシルトと砂の互層となる紫雲寺潟基底の泥層である。

(1) (梵字カ)
「□ 南無阿弥陀仏

(135)×17×1 061

上端部は圭頭状につくり、下端部はほぼ真横に折れている。刃物の痕跡はなく、近隣から流された状況を考慮すると、その過程で欠失したと思われる。また、中央やや下部でも分断されているが、こちらも人為的な切断ではない。幅は一定だが、三文字目付近から緩やかに湾曲する。表面の調整痕跡は一部でしか確認できないが、裏面は明瞭である。墨痕は表面にだけ認められる。発見時から墨痕は非常に薄く、一・二文字目だけがようやく肉眼で観察できる程度で、その他は赤外線装置を用いなければ判読は難しい。一・二文字目の間は間隔を開けており、二文字目以降の文字内容を合わせて考へると、一文字目は梵字であると推測される。木簡の性格としては、文字内容から塔婆として用いられたと推測される。上端部を圭頭状にする形状や厚さが非常に薄い特徴も、他の塔婆とされる木簡に近い。

問題はこの木簡の時期で、二つの可能性が想定される。第一に、

木簡の出土したVI層の土器や斎串などの遺物からは、九世紀後半と考へられる。しかしながら、この時期に塔婆、特に木製塔婆の使用を確認することはできず、出土資料にも見出せない。文献史料では、菅原征子氏（『日本古代の民間宗教』）が信憑性を指摘する「僧妙達蘇

生注記」（『続々群書類従』第一六雜部。新日本古典文学大系『三宝絵注好選』所収）に、隣接する越後国蒲原郡大領守部有成が一〇世紀に塔婆を設立した記事を見出せるが、これが木製塔婆とは断定できない。よって、塔婆の使用は今のところ一〇世紀以降と考えられ、塔婆の形状を呈した本木簡の時期を九世紀後半とは決めがたい。

第二は、梵字を含む文字内容や、薄く湾曲するような本木簡の形状、草履芯や先が二股に分かれたいわゆる雁又の鎌、短刀などの金属製品が遺物の中に含まれていることから、中世に属する可能性もある。ただ、中世と思われる遺物が出土する層位は、木簡が出土したVII層より上層であり、出土層位が異なる。

以上、いずれも十分な根拠に欠け、時期の決定は難しく、現段階では九世紀後半と中世の両方の可能性を示すに留めたい。

9 関係文献

新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書V 青田遺跡』（1990四年）

（田中一穂）

